神無月の風

小川　瑛子

今中静子は48才の専業主婦だ。ショートヘアーで化粧気も少なく、小さな目鼻立ちで性格も控え目だ。夫の俊作は50才で市役所の広報課の係長をしている。メガネをかけ少し額が禿げ上がっていて最近下腹も出てきた。二人は見合い結婚で子供はいない。

街はずれのどの家も皆似た様な3DKの分譲住宅から俊作は判で押した様に、朝七時半定刻に市役所へ自転車で出かけ、夕刻五時半定時に帰宅する。

妻の手作りの弁当のおかずは品数も多く、同僚の羨望の的だ。

「おっ、今日も豪勢な弁当」

と、仲間が覗き込むと、俊作は笑顔を見せ自分ほど幸せな者はないなと、心の中でつぶやく。

仕事も緊迫する事柄は殆どなく、のどかに時間は過ぎる。平穏を望む俊作にとってありがたい職場だった。

俊作は魚釣りだけが趣味で、休みになると決まって釣り具を自転車にのせ

「行ってきます」

と、見送る静子に片手をあげた。

『平凡ほど良い物はない』と心底思っている俊作は、今の生活に100％満足していた。妻が家庭的で外出も余りせず、小さな庭に花をいつも咲かせているのも好ましかった。

『定年を迎えたら一度夫婦で静かな所にある温泉にでも行こう』が彼の夢だった。

静子は夫が仕事に出かけると、家事を手早くすませ、玄関横の三畳の小部屋にいそいそと入る。

部屋の半分を占める机の上に、大小のは端ぎれ布が幾枚も広げられていた。紺の大島、きんしゃ錦紗、りんず綸子ちりめん、どんす、丸帯の一部、木綿とみな着物にかかわる物ばかりだ。

亡くなった母は着物で一生を過ごした様な人で、自分の物、静子の子供の頃の物、祖父や父の着物までそっくり箪笥にしまって世を去った。
手先の器用な静子は着物をほどいて洗い直しに出し、羽織やブラウスに仕立て直した。小さな端布は、パッチワークで色合わせを工夫しながら手さげ袋に仕上げた。帯の豪華な所を中心に切り取り、まわりを錦紗でかがり、客間の座卓のセンタークロスに変身させた。
これらふるぎれ古裂は本物の良さ、艶を持っているので、完成品は渋く風格があった。
「素晴らしいね。日本伝統の技の継承者ね。静ちゃんは！」
と、45才のいとこの郁子が遊びに来た時驚いた。
「静ちゃん、プロみたい。教えたらいいのに。
三丁目にあった手芸教室が空室になって、利用者探してるそうよ」
と勧めた。
「そんなこと、とてもとても無理、第一俊作さんが反対するに決まってる」
静子は照れて、目の前で手を左右に振った。
俊作は静子の趣味に
「精が出ますな」
と微笑むだけで、その後に続く言葉もなく関心も余りなさそうだったからだ。

夕食後、夫婦でテレビのドキュメントを見ていると電話のベルが鳴った。
「はい、今中です」
俊作は『誰だ、今頃』と、ぶすっとした顔で電話に出た。
「モシモーシ、今中静子さんのお宅でしょうか」
と、高い女の声が受話器に響いた。
「そうですが……」
「私、下田美紀と申します。静子さんの高校の同級生です。静子さん、いらっしゃいます?」
と、早口で言った。
「静子、君にだよ。下田美紀さん」
と、俊作は静子に苦い顔のまま受話器を渡した。

「まあ、美紀さんなの！　御無沙汰しています」
静子の顔が一気に輝いた。
電話の向こうで美紀は
「ほんとに御無沙汰ね。実はね。今年の九月、十年振りの同窓会をしようという話があって私幹事になったのよ。それで貴女にも手伝っていただきたくて。ね、いいでしょ」
と、一気に言った。
「ええっ、私が……」
と、戸惑う静子に
「私ね、これでもちょっとした芸術家でね。御宅の近くの木下町に自作の陶芸品を並べて御店も出してるの。貴女の所から歩いて30分の所よ。一度作品見がてら同窓会の相談にいらしてよ。電話番号教えとくね。あっそれからね。私離婚して一人よ。だから、本当に気兼ねなくいつでもいらしてね」
と、電話は切れた。
『青のしずく』という名の壺で最近美紀が女流陶芸大賞を取ったという事を静子は新聞で知っていた。高校生の頃から美紀は美術部で盛んにトルソーを作り、彫刻家になりたいと一心不乱に研鑽を積んでいたのも思い出した。
紅潮した顔の静子に、俊作は
「おい、どうした？」
と、いぶか訝しげに聞いた。
静子は
「貴方、ほら前に話してたでしょ。『青のしずく』という名の壺で大賞を取った作家の下田美紀さんなのよ。木下町に御店出してたなんて知らなかった」
と、秋の同窓会の相談に彼女の店まで出向く様言われたと言った。
「フーン」
と、言う俊作に静子は
「明日、出かけます。御夕飯までには帰ります」
といそいそと断言した。
夫の同意なしという事は、今迄なかったので俊作はまごつき、いささか不快だった。が、自分の留守の時間を使うのだから、反対する理由もない。

あくる日、俊作が
「ただいま」
と家のドアを開けると、ハアハア言いながら静子が追っかけてきて
「遅くなって……」
とペコンと頭を下げた。
夕飯は出来合い品が並び
「ごめんなさい。予想外に時間がかかって、今日はがまんしてね」
と、静子は小さくなってあやまった。
俊作は憮然としていたが、たまには仕方ないかと気持ちをおさめた。
食後に静子は
「美紀さんの御店、とてもモダーンな感じで展示してある壺も個性的だったの。でも、やはり『青のしずく』は圧巻だったわ。色は目もあざやかなトルコブルーで、高さ50㎝のすらっとしたシンプルな壺。青の濃淡の縦線が雨のしずくの様でもあり、宇宙の稲妻の様でもあり、神秘的だったの。さすが大賞だけのことはあるわ」
と自分の事の様に誇らし気に言った。ふっくらとした顔で目がとびきり大きくてグラマラスな肢体の美紀の自信に満ちた顔が浮かんだ。
「高校の友人三人も一緒だったの。私の着ていった綸子で作ったブラウスを、皆ほめてくれて……。次回は手さげカバン見せてと約束させられた」
と、今迄俊作には見せたこともないような嬉しげな様子だった。

静子の秋の同窓会も無事に終わった。それまでも静子は打合わせ会と言って、時々出かけていたが、俊作の生活に支障を来すような事はなかった。

年が変わった二月のある日、ふいに美紀が静子を訪ねてきた。
「車で通りかかって、貴女の手作りの品々を見せてもらいたくなったの」
と美紀はさっさとブーツを脱いだ。
客間に案内して、帯地のテーブルクロスを見せた。
「これは凄い。エキゾチックでエスニック」
と声を上げた。

御納戸茶の重厚な地に金茶、灰色の模様が木の葉の様に描かれたのを手に取った美紀はうな唸った。
「ほかのも見せて」
と言う美紀に、静子は整理タンスの中から小さな雛人形を取り出した。
空豆位の白いちりめんの小さい顔に、紫色の古裂の衣装をまとった男雛と、ぼたんの花模様のくすんだ赤の着物の女雛だった。目鼻は描いてなくて、黒い糸が何本も張りつけられて髪になっている。金茶と朱色の袴を見せて、赤い座布団に座った二人は、全体を見ると高さ8㎝の三角錐のシルエットだ。
「かわいい、愛らしい」
美紀は優しい表情で雛達に触れていたが
「静子さん、貴女、もっと本格的に修業してプロとして一本立ちしなさいよ。私『わぎれ和裂細工』のとっても素晴らしい先生と知り合いなの。先生、四月に私の店の近くで、又一つ教室を始められるの。紹介するから是非弟子入りしなさいよ」
と興奮気味に言った。

美紀が帰った後、静子はぼーっとしていた。
今迄、本を読んで真似て作っていただけだが、
『もっと色々な物作りたい。教わりたい』と
思っていた矢先だった。
物欲も余りなく、穏やかで自分と同様平凡なこの生活に満足していると思っていた静子から、突然、月二回「和裂の教室に通いたい」と言われ、俊作は怪訝な顔をした。
静子は
「貴方が厭ならやめますけど……」
と目を伏せた。
『切り盛りも上手で自分にとっては最高の女房にここはひとつ報いてやろう』と俊作は
「行ったらいいよ」
と言うと、静子は破顔一笑した。

四月になって、静子は和裂作家、俵陽一郎の新しい教室に通う様になった。
陽一郎は62才の一人暮らしだった。幼い頃から祖母に日本各地域の伝統的な行事や歴史を繰り返し教わっていた。その上、デパートの仕入れ担当として長年勤務した事がその知識を豊かにした。日本の隅々まで足をのばしての仕事だったので、祭り、慣習、しきたりもじか直に見聞きし、その土地独自の物産も入手した。
半分白くなった頭髪を七三にきっちり分けて、長身で細身の陽一郎はダンディでデパート勤務時代もファンは大勢いた。七年前に妻を癌で失くした。一人娘は嫁いでいたが、何でも出来る人なので不自由さは感じなかった。
定年三年前に退職し、長年の夢であった和裂細工の教室を、遅まきながら開こうと決心した。
『こんなに素晴らしい日本の伝統芸術を若い人にももっと知ってほしい。愛してほしい』という強い気持ちが押さえられなかった。
陽一郎は自宅の一部を開放し、小さな教室を始めた。
修得した組紐、人形、めんそう面相等全ゆる事を教えていった。生徒はじわじわと増えていき陽一郎は楽しくて仕方なかった。
土粘土で3㎝ばかりの紡錘形の蓑虫を作り、それに面相筆で顔を描き、端裂の衣装を着せた。手ぐすで黒塗りした木の枝に結び、ゆらゆらと揺れる様にした。
「先生、私のこの蓑虫、長助、こっちは姫子そっちは武志と言う名です」
と、きらきらする目をして作品を見せに来る生徒もいる。
桐の扇面の板に、三角おむすびの様な押絵の男雛女雛を飾ったのも大好評だった。生徒が増えていき、自分の作品もあちこちに展示され出すと、カルチャーセンターから講師依頼がきた。
そこで俵は下田美紀に出会った。二人はお互いの才能を認め、同じ講師仲間として付き合い、忌憚なく意見を言い合える間柄だった。
静子が陽一郎に最初に習ったのは、ピンクのしきし色紙に男雛女雛をバランス良く押絵する事だった。雛好きの静子は夢中で瑠璃色の花の布を手に取り、男雛女雛の着物の釣り合いがとれる様に切り抜いた。男雛の袴と女雛の帯は同じ海老茶の布から作った。

『三つ衿は何色にしようかな?』
と思案しているところに、陽一郎が回って来て
「なかなか良い組み合わせですね」
と声をかけてくれたので、静子は頬を染めた。
薄い板に、緑に金色の点々の染め紙を貼り、その上に、雛達の載った色紙を固定し、壁飾りは完成した。
第一回目の一時間半の授業で静子が手にした作品は、ちょっとユーモラスだった。初めて使った面相筆で描いた眉がアンバランスだったのだ。
『これも愛嬌があって、よし』
と静子は、くすっと笑った。幸せだった。

帰ると、静子はいつになくはしゃいで、教室の様子を俊作に話して聞かせた。
「あなた、楽しかったわ。お雛様の押し絵を習ったのよ。色の組み合わせも褒めてもらった」
うきうきした調子で言う静子に
「フーン」とだけ言って、俊作は読んでいた新聞から目を離さない。
静子は憮然とした顔でもう一度俊作の顔を見た。が、俊作は顔も上げない。
静子は、白けた顔で部屋を出て行った。

俊作の反応には期待する事は止めて、静子は制作に精をだし、作品は増えていった。

一年経ち、静子は生気溢れる顔付きになり美しくなっていった。
「俵先生の奥深い教養とそれを発展させる閃きと、私達に深く、広く教えてやろうとする熱意と研究心を尊敬してるの。」
と静子は魚釣りの竿を磨いている俊作に言った。
俊作は今も
「フーン」と相槌を打つだけだ。
それでも静子は
「貴方が許してくれたお蔭で、私の世界は広がって感謝しています」
と、にこやかに俊作に礼を言った。

が、俊作の興味は釣りの事だけで、唯、又
「フーン」と言い、疑似餌の手入れに余念がなかった。

静子はもともと高い技術を持っていたので忽ち和裂教室で頭角を現した。穏やかな性格の静子は周りにいる人に安らぎを感じさせ、仲間の生徒も
「俵先生、新入りで手一杯みたいだから、静子さん教えて」
と教えを乞う人が増え、陽一郎の助手の様な立場に自然になっていた。

半年経ち、十月の突風の吹く肌寒い日、俊作が帰宅しても静子の姿が見えない。
「どこにいるのだ、静子！」
と俊作は怒鳴りながら、家中を探した。
が、家の中はシーンとしている。
その時、ガタン……と玄関の戸が開いた。
「静子か？」
「はい」
と返事があった。が、静子は上がってこない。
「どうしたのだ！」
とイライラと出ていくと、静子が青ざめた顔で、靴を脱がずに立っていた。
「貴方、私と離婚してください。もう一緒に暮らしていけません。貴方には感謝しています。だけど貴方の『平凡』だけが大切で、それだけ……という考え方、暮らし方にはもうついていけない。結婚当初から、本当は異和感を持っていました。和裂細工を深めていって、私は俵先生の何処までも追求していこうという心意気や冒険心に惹かれたのです。一緒にいると喜びが湧き起るのです。貴方といると、虚しいだけなのです。お願いします。別れてください。」
と顔をひきつらせながら、静子は深く頭を下げた。
俊作は呆気にとられていたが、すぐに凄い剣幕で怒鳴った。
「俺は離婚しないぞ。いままでも楽しく平和にやって来たじゃないか。俵と一緒になるというのか。絶対許さん！」
と静子にかみつくように言った。
が、おとなしい人ほど一度決めたら頑なな所がある例に漏れず、静子も決死の顔

つきで
「離婚以外に私の選択の道はありません」
と、声を強めた。
「絶対離婚はしない」
俊作は静子につかみかかりそうになった。
静子はスルリと俊作の手をすり抜けて、玄関の戸を開けて表へ飛び出した。
俊作は裸足で後を追った。
四、五メートル先で、俊作は静子の肩を捕まえた。
その時、ゴオーッと一陣の強風がふいた。
「あっ、危ない」
と静子は風で崩れ落ちそうになっている隣の石壁を見て、俊作を突き飛ばした。
唖然としている俊作の目の前で、静子の下半身は石垣の下敷きになったいた。
近所で車を止めて静子を待っていた下田美紀がとんで来た。
救急車で病院に運ばれた静子は、大腿骨の複雑骨折ですぐ手術を受けた。
病院の廊下で、美紀は俊作に
「静子の貴方への手紙です」
と便箋を渡した。
魂の抜けたような顔の俊作は、震えながら読みだした。
〝俊作様、許してください。私は心から尊敬し愛する人に出会ってしまいました。その人と一緒に暮らすかどうかはわかりませんが、こんな気持ちのまま貴方と日々を過ごすことは、不可能です。勝手な言い草ですが、貴方もどうか幸せになってください。
静子〟
と言う文面に俊作は泣き出した。
暫くして、美紀が近づいてきた。
「俊作さん、静子は貴方を愛していなかったけれど、身を挺して貴方を庇ったのよ。

今は混乱して、何が何だかわからないでしょうが、静子の本当の幸せを願って、そして叶えてあげてください」

と頭を下げた。

俊作は一人暮らしになり、今までどうりの生活をしている。

静子は片足に障害が残った。今は一人で、小さな和裂細工の教室で教えている。

「佑子さん、女雛のお顔、もう少しふっくらさせたら初々しくなるわよ」

「友ちゃん、男雛の衣装、少し地味じゃない？」静子は少し足を引きながら、狭い教室の五人の生徒達の間を行き来してアドバイスをしている。

嬉しそうな目で　静子を見上げる生徒達に頷く静子の顔は、それ以上に幸せそうに輝いていた。